

# 小さな群れ

カトリック美唄教会

2023年 2月 No.309

2023年1月29日発行

許し

Fr.Narciso Cavazzola ofm

私達ヨーロッパ人にとって、日本の「武士道」は珍しく思われます。その中でも特に「仇討ち」が一つの美德とされていることは大変不思議なことです。殺された父の仇討ちをする子供は、勇気と親への愛を示すという解釈は美德といえるのだろうか。

はっきり当時の歴史の法律はわかりませんが、仇討ちをした人を裁いたり、死刑にしたりすることはなかったように聞いています。

東洋と西洋の大きな違いがここにもあります。西洋では神に向かって「私達が人の罪を許すように私の罪も許してください」と祈ります。つまり他人の罪を許す、自分に対して侮辱した人を許すことが、西洋では美德になるわけです。

でも本当に人を許せるのか、あなたの子供を殺した人を心から許せるのかと問われると、私も答えるのに苦労すると思います。

神は愛そのものであり、慈悲そのものですから、人間の罪を許してくださいますが、人間は心が小さくて人を許すことができないのではないかと思うこともあります。私自身は心から人を許さなければならないという機会がなかったので、自分が本当に人を許せるかどうかわかりません。

あるスペインの神父さまで、上智大学の教授でしたが、彼の子供の頃お父さんがスペインの内乱で殺されたことを話してくれました。一九三〇年代スペインは右翼と左翼の間で内乱が起き、彼のお父さんはある夜、反対側の人達に妻と子供の目の前で殺害されました。戦争中に起こったことなので、裁判等は一切なかったそうです。

彼は父を殺した人達の顔をはっきり見てしまったので、決して忘れることができなかったそうです。しかしお母さんは、子供の心の中に憎しみを育てるよりも、許しを育てるために、お父さんを殺した人のためにも祈りましょう、と毎晩の祈りの中に必ず加えていたそうです。子供達は復しゅうするよりも、お父さんを殺した人のために祈るよう育てられました。



”昔の人は歯には歯を、目には目を、と教えてきたが、私は云う、あなたがたの敵のために祈りなさい。それで、あなたがたは神の子となる”とイエスはおっしゃった。

人間として許すことができないから神の子として許すことができる」と云われました。



主任司祭 ナルチゾ神父

2023年2月 主日ミサ・平日のミサ 予定

美唄教会 小さな群れ  
2023年 2月 No.309  
2023年 1月31日発行

2月 召命を求める祈り・病人のための祈り

日	曜	ミサ		各種勉強会	会議・その他事項
		主日・祭日	時間		
3	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
5	日	年間第5主日	午前 11:00		
10	金	世界病者の日	午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
12	日	年間第6主日	午前 11:00		ミサ後運営委員会
17	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
19	日	年間第7主日	午前 11:00		
22	水	灰の水曜日			
24	金		午前 10:30	ミサ後聖書に親しむ	
26	日	四旬節第1主日	午前 11:00		

《 平日のミサ 》 金曜日のみ 午前 10:30  
《 聖書を親しむ 》 平日のミサ後、旧約聖書に親しんでみませんか。

霊名の祝日 (敬省略)	清掃当番	花 当番
2月21日 ドローテア 有ノ木 幸	第2週 東・葛西 第4週 大 城	東

【お知らせ】

◎2月19日(日)までに昨年度のしゅろの葉をお持ちください。

## 人生のサイクルと価値：

### 佐藤・レミリア＝ガウディアの初聖体を通じて感じたこと

佐藤・圭史＝ニキータ、シルヴィア＝マリア・オレーヤージュ（岩見沢教会）

人生の中で尊いもの、価値あるもの（value）とは何でしょうか。信仰、希望、愛…、私が感知するそれらのものと、他の人が認識しているものに違いはあるのでしょうか。いや、それ以前に、私自身が、それらの価値というものを正しく把握できているのでしょうか。そのような雲をつかむような、曖昧模糊な状況でありながらも、少なくとも私と私の家族の間には多くの価値が共有され、そして、共有されるべきであると感じています。

私の妻はポーランド人で、妻の家族は敬虔なカトリック教徒です。ポーランドでは、宗教を弾圧・否定した共産主義体制下（1945～1989年）においても、多くの人々が堅い信仰を守ってきました。妻の幼少期は、共産主義体制から自由主義体制への転換期にあたり、経済的混乱により極度の物資不足に直面した時代と重なります。写真は「嗜好品」の一種で、不足、高価なものとなっていました。妻が有していた幼少期の数少ない写真の中に、洗礼、聖体、妻の姉の婚姻、両親の婚姻などがありました。カトリック信仰の、洗礼、堅信、聖体、ゆるし、病者、婚姻の秘跡に基づき、人生の中で掛け替えのない価値を有するイベントなのです。これらは、たとえ高価であっても写真などの記録に残しておく必要がありました（妻によると、昔、病者〔死〕も写真として残した地方もあるようです）。私は、妻との婚約をきっかけにカトリックとなった成人洗礼です。洗礼、聖体の価値をよく理解していませんでしたが、残された写真からも、ポーランドの家族が、これらのイベントにどれほどの価値を置き、世代を通じて継承してきたかを良く感じ取ることができました。

価値に対する理解度は年齢により異なります。子供の時に嫌々ながら参加させられた行事に、大人になってから価値を見出し、自身の子供に晴れ舞台を用意するという状況は方々で見られることです。ここには家族の間で時間を超えて共有される価値のサイクルがあるものと思います。そのようなサイクルは、また、至る所であり、私たちの生活に影響を与えます。政治家のサイクル、専門家の



サイクル、組織のサイクル、伝染病のサイクル…。私は、最終的な判断の拠り所として、やはり家族のサイクルへと立ち返ることになります。レミリアが、その価値を今わからなくても、成長して、子供を持ったときにそのことを理解し、カトリック美唄教会で豪華に祝われた式典を自身の子供に催してあげたいと思えるようになる。そのような環境を私たちが提供することが、時間と空間を超えた、家族の価値のサイクル、そして信仰に関わる大きなサイクルを維持するために必要なことと思います。日本の多くの教会から「教会らしさ」が失われている昨今、私たち家族の価値にご理解いただき、かつて日常的に行われてきた形で、初聖体の儀式をご準備いただいた、美唄教会の信徒の皆様へ改めて感謝申し上げます。また、ポーランドでも伝統的に行われている、聖体に向けた準備期間（学習期間）を設けていただいたナルチゾ神父様に感謝申し上げます。このような厳しい環境の中、ポーランドとカトリック信仰の大きなサイクルの価値の中にレミリアを含めることができたものと確信しております。美唄教会の信徒の皆様、ナルチゾ神父様のご理解・ご協力がなければ、成し得ることができませんでした。ありがとうございました。

